

平成23年度 アイヌ民族文化研究センター運営協議会会議録

1 日 時

平成24年 2月23日(水) 13:30～15:15

2 場 所

アイヌ民族文化研究センター会議室

3 出 席 者

(1) 委 員 (職名等)

委員長 加藤 忠 (社団法人北海道アイヌ協会理事長)
副委員長 津曲 敏郎 (北海道大学大学院文学研究科教授)
委員 大島 直行 (伊達市噴火湾文化研究所所長)
委員 荻原 真子 (千葉大学名誉教授)
委員 加藤 町子 (社団法人北海道アイヌ協会札幌支部会員)
委員 熊谷 カネ (社団法人北海道アイヌ協会様似支部理事)
委員 澤田 一憲 (社団法人北海道アイヌ協会理事)

(吉田真弓委員 ～ 欠席)

(2) 研究センター職員 (職・氏名)

所 長 泉川 睦雄
副 所 長 原 浩司
研究主幹 古原 敏弘
総務課長 村上 誠一
研究課長 小川 正人
研究職員 大谷 洋一

4 議 題

- (1) 平成22年度事業実施結果について
- (2) 平成23年度事業実施状況について
- (3) 北海道開拓記念館との統合の検討状況について
- (4) 意見交換・情報交換

5 配布資料

- (1) 資料1 平成23年度アイヌ民族文化研究センター運営協議会委員名簿
- (2) 資料2 アイヌ民族文化研究センター運営協議会設置要綱
- (3) 資料3 年報2010(平成22年度)

- (4) 資料4 平成23年度事業実施状況
- (5) 資料5 平成23年度研究センター予算

6 協議経過

- (1) 平成22年度事業実施結果についての説明と質疑応答
- (2) 平成23年度事業実施状況についての説明と質疑応答
- (3) 北海道開拓記念館との統合についての検討状況の説明と質疑応答
- (4) その他

7 協議の内容（要旨）

(1) 平成22年度事業実施結果について

事務局から、資料3により平成22年度の事業実績を説明。

質疑応答

委員：研究センターの予算について、平成20年度の移転に伴い維持管理費が大きく減少したとのことであるが、他の費目についてはどのような傾向になっているか。

事務局：ここ数年は、全体的に、毎年、前年度比約10%削減が続いている。これは道の財政上の方針によるものである。削減により確かに全体的に経費のやりくりは厳しくなっており、例えばパソコンの借上げのように、実質的な価格が下がった費目などのやり繰りをして経費の確保につとめている。

(2) 平成23年度事業実施状況について

事務局から、資料4及び5により、平成23年度の事業実施状況を説明。

質疑応答

○研究課題について

委員：研究課題「近代北海道におけるアイヌ児童を対象にした私立学校に関する歴史的研究」の内容をわかりやすく説明してほしい。

事務局：私立の学校では、ジョン・パチェラーのキリスト教の学校が有名であり、帯広や本別では仏教のお坊さんが説教所を開いていたというケースが知られている。他の地域でも移民の方々が子供たちを集めて読み書きを教えていたということが各地で伝えられていることが判明している。そこで、公立の学校設立以前は、どのような流れで教育の機会があったのかというようなことを追いかける狙いで設定した課題である。

委員：それは、アイヌの児童というように限定されているものなのか。

事務局：アイヌに限定されている場合もあれば、シャモ（和人）とアイヌの子供が混在しているケースもある。

委員：研究課題「和人の散文説話資料に関する調査研究」の「和人の散文説話」とはどのようなものなのか。

事務局：基本的には、和人の物語がアイヌに伝承されて語られるようになった物語である。

○「ほっかいどうアイヌ語アーカイブ事業」について

委員：音声資料のアーカイブについては他でも取り組まれているのではないかと思うが、アイヌ語普及の将来のことを考えると、例えば国内での一元化といったことは検討しているのか。

事務局：事業を始める前に大学や関係機関の研究者の方々と、将来において一元化に対応する場合の問題点、ポータルサイトの活用や統合の際に共通にしておくべきことなどについて議論した。関係の博物館等とも連携をとっていく考えでいる。

委員：音声資料をインターネットで公開している他の機関はないのか。

事務局：アイヌ民族博物館では、「アイヌ語デジタル絵本」というかたちで、物語を絵本にして音声を聴かせている。

委員：アイヌ語の学習者のための仕組み、たとえば「挨拶」なら「挨拶」というキーワードで検索できる仕組みを作るのか。

事務局：現時点では資料を聴けるようにすることを優先しているが、将来的には勉強のステップとなるような教材も作れたらと考えている。

委員：今回の事業には、音声資料を聞き起こして和訳を付けるようなテキスト作成も含んでいるのか。

事務局：今回の事業では先ず資料を公開することを優先しているので、現段階でのテキスト作成については、内容のおおよそを確認しプライバシー等の有無を判断できる程度のものを作成することに重点を置いている。

委員：公開する資料は約1,000点ということであるが、その内訳はどのようなものか。

事務局：この事業の対象としている資料は、当研究センターで所蔵している「山田秀三文庫」「久保寺逸彦文庫」のほか、北海道立図書館と開拓記念館で所蔵しているものを加えると概算で1000点が見込まれる。

（3）北海道開拓記念館との統合についての検討状況について

事務局から、「北海道博物館」基本計画と、その中で予定されている研究センターの開拓記念館への統合とにかかわる、現時点の状況を説明した。また、研究センターとしては、この統合について、研究センターの機能の維持ならびに充実強化を図る方向で進めてほしいこと、また、基本的にはそのような方向について庁内でも同意を得ていること

等を報告した。

質疑応答

委員：北海道博物館との統合に当たり、研究センターの特徴を維持するということは、組織的にはどうかたちになることをイメージしているのか。

事務局：具体的な組織のあり方は今後検討されることであるが、イメージとしては、北海道博物館という中でアイヌ文化の研究部門の名前が見えるようなかたちである。

委員：アイヌ文化に対する道民の考え方や位置づけが、以前よりも高まっている状況を考えると、統合についてのそのようなイメージには賛同できる。

事務局：アイヌ文化の調査研究にかかる機能の維持ならびに充実強化を図るとともに、統合による学芸員・研究員の人的交流の活性化などを図れるようにしたい。